

第 18 回日本運動疫学会学術総会 特別企画シンポジウム

日時：6 月 20 日（土）15：15-17：15

場所：中京大学名古屋キャンパス

【テーマ】

東京オリンピック・パラリンピック・レガシーと身体活動・運動・スポーツの推進－学術はどう貢献できるか

【趣旨】

東京オリンピック・パラリンピック（以下、五輪）が 2020 年に開催される。近年の五輪では「レガシー（遺産）」と呼ばれる概念が注目されており、五輪招致・開催にあたって築かれる有形・無形の遺産を、いかにして持続可能な形で残していくことができるのかに関心が寄せられている。

運動と健康増進に関心を持つ日本運動疫学会会員の立場からは、五輪の招致・開催を通じて、身体活動・運動・スポーツ人口が増加し、人々の健康、幸福に資するならば、無形のレガシーとして価値が高い。

そこで本シンポジウムでは、五輪開催という、またとない機会に際して、学術がどのように貢献できるかを考えたい。この巨大なイベントを通して、身体活動・運動・スポーツの普及・推進を進めるには何が必要なのか、その効果をどう評価できるのか、無形の遺産を持続させる仕組みはどうすればよいのか、など多くの課題がある。まずは五輪の精神・仕組みを知り、2020 年東京大会の計画を知り、そこに向けてどんなことができるのかを討議し、今後の活動を考える場としたい。

【企画内容】

<座長>

岡浩一朗（早稲田大学スポーツ科学学術院）

井上茂（東京医科大学公衆衛生学分野）

<基調講演>

スポーツには世界と未来を変える力がある（講演時間 25 分）

布村幸彦（公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副事務総長）

<演題・演者>（講演時間各 20 分）

1) オリンピック・パラリンピック・レガシーとは

間野義之（早稲田大学スポーツ科学学術院）

2) What is the evidence for physical activity promotion before and after Olympic/Paralympic Games - expectations for Tokyo 2020

Adrian Bauman (Prevention Research Collaboration, Sydney School of Public Health, Sydney University) <Skype 出演>

3) 東京オリンピック・パラリンピックに向けて運動疫学の果たす役割

鎌田真光（ハーバード大学医学大学院、国立健康・栄養研究所）

総合討論（討論時間約 30 分）

【期待される成果】

<会員>

研究者、運動専門家においては、東京五輪開催を通して身体活動・運動・スポーツの普及、推進が図れるのではないかと漠然とした期待がある。しかし、自分自身の仕事とこのイベントがどう関係するのか、五輪にどう貢献することができるのか、といった具体的な認識には乏しい現状ではないだろうか。本シンポジウムを通して五輪の精神、仕組みを学び、東京大会の計画を知ること、それぞれがこのイベントに関わる方法を考えるきっかけになることを期待する。

<オリンピック・パラリンピック関係者>

五輪の開催によって、身体活動・運動・スポーツを実施する国民が増えるという事実は、近年の開催国のデータからは確認されておらず、それを実現するための計画的な取り組みも不十分であったと報告されている。簡単な課題ではないが、東京五輪において何らかの成果が得られるならば（たとえそれが「計画的な取り組みを実施した」というレベルであっても）、東京 2020 は世界に誇れる五輪の新しい価値を提示することになる。また、五輪に貢献したい研究者がいることを知っていただき、五輪の価値を身体活動・健康の観点から議論することで、今後の連携の可能性が広がる。

<海外研究者との連携>

Adrian Bauman 氏は「身体活動のポピュレーションレベルでの推進（身体活動をより多くの人々に普及するための科学的な施策）」を主要な研究テーマとしている。身体活動研究では世界的権威だが、それは以下のような事実からもうかがえる。

1. 身体活動のガイドラインは、米国で作成されたものが、WHO をはじめとして世界的に流用されている現状である。そのガイドラインの著者グループで米国人以外は Adrian Bauman 氏だけだった。このことは、この分野において Adrian Bauman 氏が高い評価を得ていることを示している。
2. 2012 年に発表された世界的な医学誌 LANCET の身体活動特集号で Paper3 の筆頭著者を務めた。
3. 世界各国の身体活動をモニターする Lancet Physical Activity Observatory の主要メンバーである。
4. WHO が発表している世界各国の身体活動レベルのデータのかなりの部分は、Adrian Bauman 氏が主導した International Physical Activity Prevalence Study によっている

Adrian Bauman 氏は五輪に高い関心を持っており、ロンドン五輪、バンクーバー五輪でも身体活動・運動・スポーツの推進を図るべく、各方面に働きかけてきた。また、シドニー五輪が国民の身体活動量にどのような影響を与えたかを科学的に検証した論文を British Journal of Sports Medicine 誌に掲載している。検証結果は、「国民の身体活動レベルは五輪前後で変わらなかった」というものであるが、この事実を変えるために何が必要であったかについても、身体活動促進の専門家の立場から考察している。本シンポジウムのテーマにふさわしい研究者であり、氏の経験から学べることは多い。今後の連携にも意欲的であり、本シンポジウムをきっかけとして、今後、国際的な協力が構築されると期待できる。

<日本運動疫学会>

本シンポジウムを契機として、学会内にレガシープロジェクトチームを立ち上げることを提案したい。このプロジェクトでは、学術の立場から五輪にどのような貢献ができるのかを検討し、活動を展開する。